

「飛越高原天の夕顔の道」を有峰から回想する

- 中河与一の小説「天の夕顔」とその文学碑に寄せて -

令和5年3月25日

有峰森林文化村

2002年ノーベル賞を受賞した故小柴昌俊さんと田中耕一さんが富山県と国道41号線にゆかりのあったことから富山市から岐阜県高山市までの国道41号（約90キロ）がノーベル街道と名付けられた。一方富山市小見から、有峰湖、飛越トンネルを経て岐阜県高山市上宝町までの区間は、**中河与一**の名作「天の夕顔」にちなんで、「**飛越高原天の夕顔の道**」という愛称で親しまれている。有峰林道・大多和線の富山県側の**大多和峠**（標高1307m）には、**中河与一**の「天の夕顔」の**文学碑**と**歌碑**（自作短歌）が建立されている。大多和峠の文学碑からは、真正面に、薬師岳を眺望することができる。中河与一は昭和37年8月5日、この文学碑の除幕式に夫婦で参列、真正面に見える薬師岳を絶賛、翌日薬師岳に登頂している。

今回、**前田英雄**編「有峰の記憶」に寄稿された中河与一『「天の夕顔」の改訂について』や廣瀬誠の『天の夕顔文学碑をめぐる』をはじめ、中河与一の「天の夕顔」やノンフィクション・**飯田辰彦**の**有峰物語**「山の時間」を生きた日本人などから、中河与一と有峰との関連について解説し、飛越高原天の夕顔の道を有峰からの目線でご案内します。



大多和峠の「天の夕顔」歌碑
(自作短歌) (左) 文学碑 (右)



大多和峠の文学碑前から薬師岳の眺望

●中河与一「天の夕顔」 有峰村が登場する唯一の小説作品

中河与一（1897年-1994年）は、浪漫派の小説家・歌人として知られている。

「天の夕顔」は、昭和13年に刊行された純愛小説で、永井荷風に激賞され、アルベール・カミュから讃辞を送られるなど浪漫主義文学の傑作とされている。但し「天の夕顔」の**原作者の藤木耕三郎**は、古川から大多和峠経由で来有経験（大正9年）はあるが、山之村では**2年間の生活体験者**であることを忘れてはならない。



中河与一 天の夕顔/新潮文庫

【あらすじ】大学生の主人公（わたくし：滝口）が下宿の娘（あの人：人妻あき子）を慕って二十余年にわたり、一途に求愛し続けたが、その間理由のない離反と何もおこらない淡い逢瀬を繰り返す。自らの気持ちを鎮めるために山中（有峰経由で僻村山之村）に籠もる。その際に女と再会を約束し、5年後に山を下るが、女は既に亡くなっていた。男は女を偲んで、天にいる女（あの人）に消息する方法として、女が手にしていた夕顔に似た花火を打ち上げるという物語である。山之村（神岡町山之村地区）における冬ごもりの様子や感慨が描写されているものの、有峰村が登場する唯一の小説作品としても注目したい。

以下に「天の夕顔」の有峰に関連する部分を抜粋し紹介する。

【「天の夕顔」の有峰に関連する部分の抜粋】

「天の夕顔」第5章、「わたくしは高山線を古川でおりると、案内を雇って、越中の有峰をめざしてゆきました。それはかつてアルプスに登った時、そこが一等山深いところだと聞いていたからで、わたくしはこの世から最も遠いところに隠れたいと思っていたのです。・・・」（中略）それから二時間ほど歩いて、わたくしたちは有峰に着きました。初雪が薬師ヶ岳の峰にかかって、それが胸がすくように見えました。

「天の夕顔」第6章、「山に帰ると、わたくしは寒い時、暑い時、毎日のように仰ぎみても自分の慰めとしていた。同時に長年の願いでもあった薬師ヶ岳に登ろうと考えだしたのです。（中略）、そしてやっと三度目に、大多和峠からいったん有峰に入り、小畑尾峠に出、そこから登ってこれに成功することができたのです。（中略）、かつて二三日いた懐かしい有峰の盆地に着くと・・・」（中略）

「東側の大きなカールを越えて、はるか遠くの下に、黒部川の上廊下が想像され、もちろん水は見えなかったけれども、その谷音が手にとるように上へ聞こえてくるのを聞きました。それはまさに天の旋律のようなにわたくしの心を魅了しました。」と薬師岳登山に言及した描写の他、黒部五郎岳への登攀、立山連峰の攻略、三俣蓮華小屋での籠もりの記載もある。

○中河与一「天の夕顔」文学碑の除幕式に参列、建碑へのお礼、翌日薬師岳登頂、「天の夕顔」改訂版作成へ（前田英雄編 有峰の記憶より抜粋）

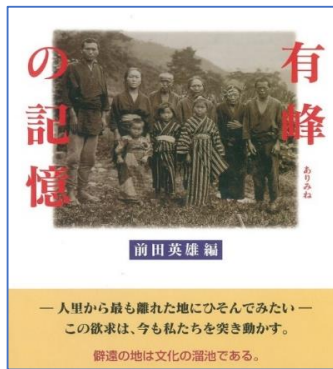
昭和37年（1962年）8月5日にはこの「天の夕顔」文学碑の除幕式が開催され、中河与一氏自身も夫婦で参列、同日夕方薬師岳に登攀し、翌日登頂を果たしている。前田英雄編「有峰の記憶」刊行に当たり、中河与一が「天の夕顔」改訂についてと題し寄稿している。冒頭の書き出しは、以下の通りである。『有峰の湖畔に「天の夕顔」の碑を建てて下さったことは、作者にとってこの上もなくありがたいことであった。然も、それがよりすぐれた景勝の地であり、少しでも天に近い高所であったことは、この作品にとって何よりもふさわしいことであった。前方に薬師、立山、劔の連峯を眺め、後方に加賀の白山を見るというような場所は滅多にあることではない。・・・』

【「天の夕顔」改訂の経緯】

※除幕式に参列した中河氏は、初めて実地に有峰の地を踏み、越中人の深く切ない心情に触れ、有峰から薬師岳の頂上にも登り、この経験をもとに、「嘗て、二三日あつた懐かしい有峰の盆地」や「そしてやっと三度目に、大多和峠からいったん有峰に入り、小畑尾峠に出、そこから登ってこれに成功することができたのです。」など、「天の夕顔」改訂版を作成している。この改訂に当たり、県立図書館の廣瀬誠氏に往時の登山道（有峰盆地→小畑尾峠→薬師岳）の調査も依頼している。

○文学碑の建碑と富山県との関連（前田英雄編 有峰の記憶より抜粋）

- ・昭和37年、富山大学植木忠夫教授「天の夕顔」の文学碑建碑を発願
- ・郷土史家重杉俊雄氏文学碑建碑に協力（「天の夕顔」の山之村冬ごもりの描写・薬師登山の記述に感動して）
- ・北日本新聞社による事業の推進
- ・中河与一作詞の短歌「夜ふかき」を富山大学教授黒坂富治が作曲
- ・昭和37年8月5日富山県知事吉田實氏除幕式に参列「有峰は神秘的な地」と祝辞
- ・除幕式当日参加者一同で「夜ふかき」斉唱、歌声が飛越国境の山空に澄みてひびき渡る



前田英雄 有峰の記憶/桂書房

有峰は廃村（大正十年=1921）になって八十八年、水没してからも半世紀になろうとしている。富山県内では唯一の高原盆地（標高千mで、平地から隔絶した県境の僻遠の地、「陸の孤島」のような地であった。一方、県境を接する飛騨地方とは民族・文化・信仰の面でつながりが見られ、独自のものを伝えていた。有峰に生まれ育った人もいまでは皆無に近く、末裔と言われる人々にも語り伝えられた話を十分に聞けない状態になった。

「有峰の記憶」はしがきより抜粋

○歌碑（自作短歌）と中河与一自作短歌作成の背景

歌碑には、中河与一の自作短歌が刻まれている。

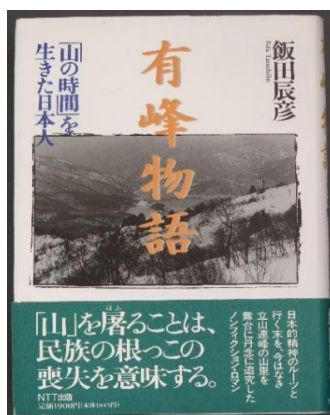
「夜布（よふ）かき やまのい保里（ほり）に ゆ免（め）さめて 曾羅（そら）わたる月を きゆるまでみし」→「夜ふかき 山のいほりに 夢さめて 空わたる月を 消ゆるまで見し」

【背景】作品のモデルとなった主人公の山之村における冬ごもりの感慨を中河与一自身が代わって詠んだ一首

●飯田辰彦著 「有峰物語」 「天の夕顔」と文学碑との関連の記載

峠の一角に、黒い御影石の石碑が立っている。〈天乃夕顔〉の碑とあり、そこには「夜深き山乃いほりに夢さめて 空わたる月を消ゆるまで見し」というなかなかの名歌が刻まれている。〈中略〉今私の頭の中で。小説『天の夕顔』にあった描写と、目の前にこの石碑が立つ理由とが自然と結ばれた。小説『天の夕顔』は、昭和十年代に作家・中川與一により発表されたもので、悲恋の純愛小説として国の内外のベストセラーになった。古川から一時間バスに揺られた小説の主人公が、有峰をめざして越えた峠が、ほかでもないここ大多和峠であったのだ。小説では、主人公の龍口は、愛する人（人妻）に添いとげられない苦しみから、ある日ついに山に籠もる決心をする。その時彼は、有峰を「この世から最も遠いところ」（原文のママ）の土地として選ぶ。当時のアルピニスト（主人公の龍口もそのひとり）にとって、有峰がそのようなイメージでとらえられていたことは、じつに興味深い。

・有峰物語 日本の精神のルーツと行く末を、今はなき立山連峰の山里・有峰村を舞台に丹念に追求したノンフィクション・ロマン、大正10年、富山・常願寺川の源流・和田川にあった有峰村が、ダム建設によりやむなく集団離村した。その有峰人の歴史、悲哀が記録されている。



飯田辰彦 有峰物語/NTT出版

大正10年、富山・常願寺川の源流にあった12戸の誇りある山里が、ダム建設によりやむなく集団離村した。この小さな出来事が映し出したのは、まぎれもない日本人の民族としてのアイデンティティの放棄と、近代文明の破綻の予兆であった。

これは、柳田国男の『遠野物語』をも視野に入れた、“忘れられない日本人”への痛切な鎮魂の書である。

「有峰物語」 帯文より抜粋

○「飛越高原天の夕顔の道」 中河与一文学の足跡を辿るロマンチック街道

「天の夕顔」の文学碑がある大多和峠展望台には富山側から大多和峠へのアクセスとなります。中河与一の「天の夕顔」にあやかり「飛越高原天の夕顔の道」めぐり、有峰林道小見線→西岸線→大多和線（大多和峠にある「天の夕顔」文学碑）→有峰林道南岸線→東谷線→飛越トンネル→山之村牧場エントランス（中河与一文学資料室と文学碑）を楽しんでみては？

有峰林道・大多和線を含めた「飛越高原天の夕顔の道」は、中河与一文化の足跡を辿るロマンチック街道と言えるのではないのでしょうか。

○大多和峠について（有峰森林文化村HPより）

大多和峠(1307m)は岐阜県との県境に位置し、平成19年まで有峰林道大多和線の料金所が設置されていました（**現在、岐阜県側は廃線**）。ここから望む薬師岳も美しく、うれ街道はこの峠を通過して岐阜県大多和集落へと続いていました。有峰から大多和へ向かう道は、婦女子の買い物道として一番容易でした。大多和峠が「タワ(峠の意)」「入出タワ」と呼ばれたことから、それだけ生活に密着した道であったことが伺えます

岐阜県へと続くうれ街道は「お伊勢参り」の道でもありました。有峰村では、毎年年末に2人の男衆を伊勢に送り出したといえます。これに選ばれることは大変な名誉で、村民全員で大多和峠まで見送ったそうです。

また、毎年初午には「チョウハイ」という習わしがあり、女衆が土産を携えて大多和や佐古、跡津川といった岐阜県側の集落に泊まり、初午ダンゴなどを持ち帰りました。それらの集落は有峰の枝村であったといわれます。女たちは大多和峠まで有峰村の男たちに付き添われ、向かう集落の男たちが峠で出迎えたそうです。

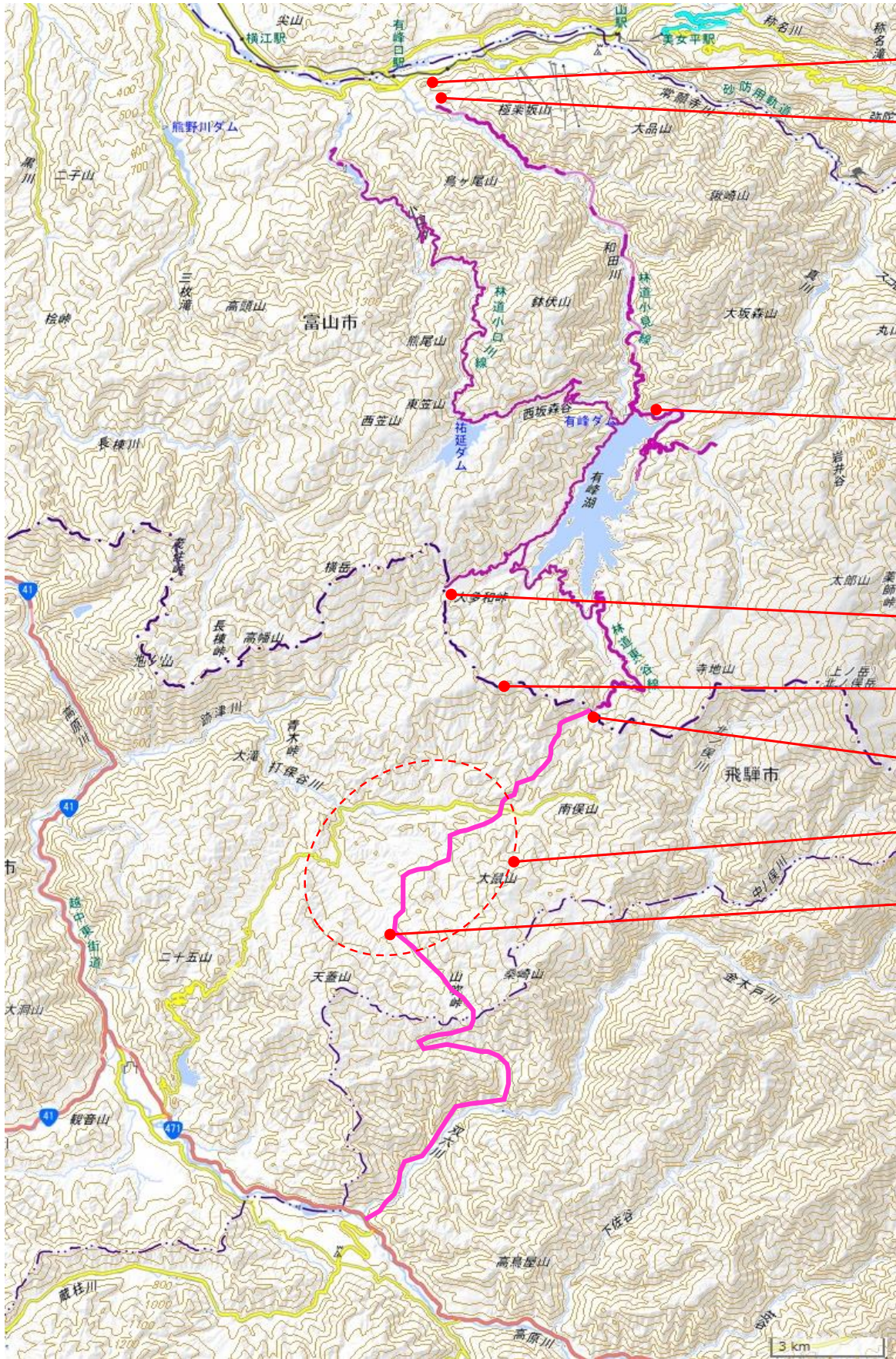
出迎えや見送る者たちは、どんな想いを募らせて峠に立ったのでしょうか。

【有峰森林文化村基本構想への回帰】

有峰森林文化村基本構想の3課題（2）感動のための工夫の項目の中に（ウ）情報の提供が盛り込まれています。今回、有峰の自然や歴史に関連する優れた文学作品として、中河与一の「天の夕顔」と飯田辰彦の「有峰物語」を紹介しました。有峰を舞台とした文学作品から有峰森林文化村での文学と歴史を感じていただければと思います。

引用・参考文献

- 1) 前田英雄編 有峰の記憶/桂書房
- 2) 中河与一著 天の夕顔/新潮文庫
- 3) 飯田辰彦 有峰物語 「山の時間」を生きる日本人/NTT出版株式会社
- 4) 「天の夕顔」モデルと確執 富山-地域-朝日新聞デジタル/2022/9/26
- 5) 中河与一 Wikipedia 2022年12月12閲覧
- 6) 有峰森林文化村基本構想/有峰森林文化基本構想検討会



- 小見
- 亀谷
- 有峰
ビジターセンター
- 大多和峠
- 唐尾峠
- 飛越トノ裨
- 山之村
- 中河与一
文学資料館

「飛越高原天の夕顔の道」